

## 平成20年度日本海マアジ長期漁況予報

—別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合研究センター  
日本海区水産研究所がとりまとめた結果—

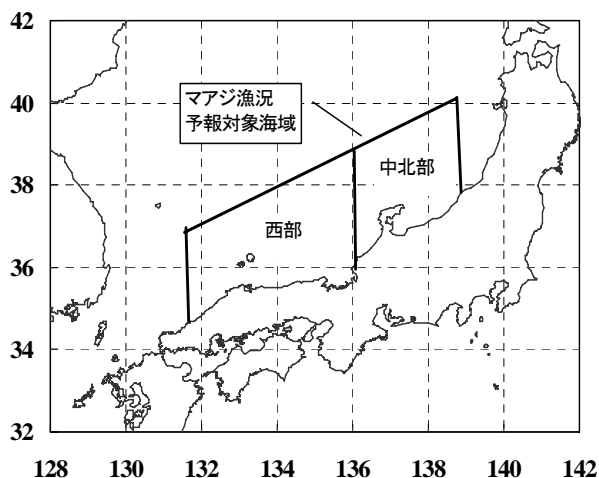
### 今後の見通し（2008年5月～9月）のポイント

対象魚種：マアジ  
対象海域：島根県～新潟県  
対象漁業：定置網、まき網

#### 来遊量

日本海西部と中北部ともに前年並み

※「前年」は2007（平成19）年5月～9月を示す。



### 問い合わせ先

水産庁 増殖推進部 漁場資源課 沿岸資源班

担当：大隈、和田、染川

電話：03-3502-8111（内線 6800）、直通電話：03-6744-2377、ファックス：03-3592-0759

当資料のホームページ掲載先 URL

<http://www.jfa.maff.go.jp/j/press/>

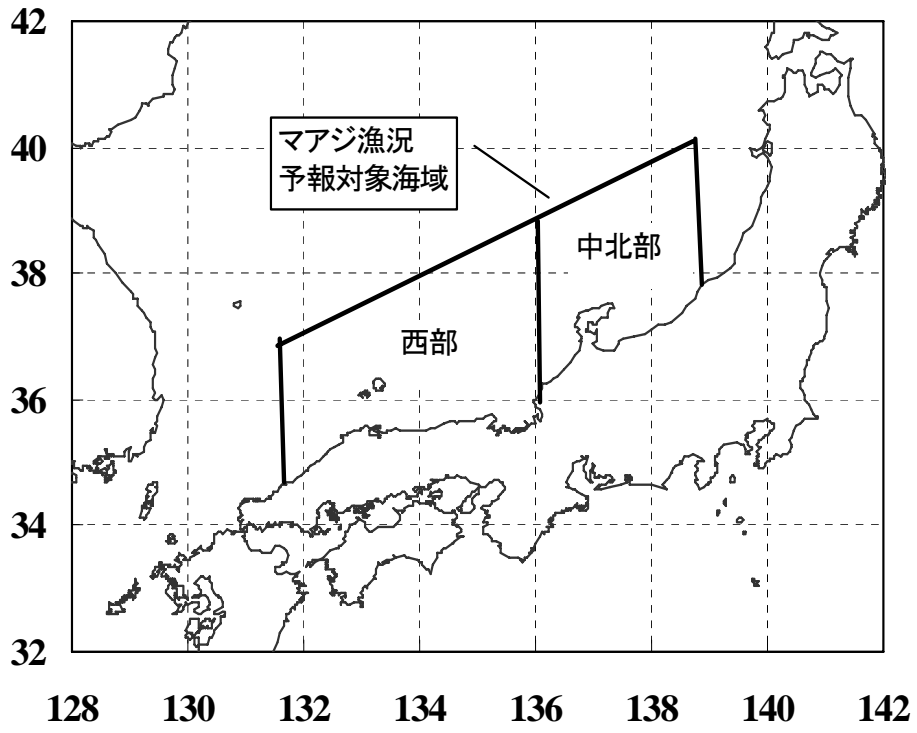
独立行政法人 水産総合研究センター 日本海区水産研究所 業務推進部

電話：025-228-0451、ファックス：025-224-0950

当資料のホームページ掲載先 URL

<http://abchan.job.affrc.go.jp/>

<http://jsnfri.fra.affrc.go.jp/>



予報対象海域

# 平成20年度日本海マアジ長期漁況予報

## 今後の見通し（2008年5月～9月）

対象海域：日本海（島根県～新潟県）

対象漁業：まき網、定置網

対象魚群：0歳魚（2008年級群（2008年生まれ））、1歳魚（2007年級群）、  
2歳魚（2006年級群）

- （1）日本海西部海域（夏以降の中北部海域を含む）では1歳魚が主体で、夏以降は0歳魚の割合が増加し、全体の来遊量は前年並みである。
- （2）中北部海域でも1歳魚が中心で、前年並みの来遊が見られる。

※「前年」は2007（平成19）年5月～9月を示す。また、「体長」は尾叉長で測定した。

## 漁況の経過（2007年4月～2008年3月）及び今後の見通しについての説明

### 1. 資源状態

日本海で漁獲されるマアジは対馬暖流系資源の一部であり、その動向は東シナ海域の資源状態と密接に関わっている。日本海における資源の主体は、春季以降に東シナ海から九州西・北域、さらに日本海西部において産卵・ふ化し、0歳魚として対馬暖流に沿って山陰、中部海域から能登半島以北に分布を広げる。越年して1歳魚となると、春季に九州西・北域から日本海西部で漁場を形成し、その後中北部に分布を広げる。その他に1歳以上に成長したものが日本海での越冬傾向が強くなり、やがて地付き群として日本海で産卵し、中北部海域で漁場を形成するものと思われる。

対馬暖流系の資源量は1970年代後半に低水準にあったが、1980～1990年代前半に増加し、1993～1998年に高水準を示した。その後は1998～2000年に加入量減少のため資源は減少傾向を示したが、2001～2004年の加入量は1994～1997年の水準に回復した。高水準期（1993～1998年）には対馬暖流域全体で約20万トンの漁獲を維持していたが、1999～2002年は13～16万トンに減少した。2003年から漁獲量は再び増加し、2004年には約19万トンであったが、2006年には13万トンに減少した。日本海における島根県～新潟県の主要港の水揚げ量は1999年の63,000トンから2002年の40,000トンに減少したが、2003年以降増加傾向を示し、2004年には68,000トンを記録し、1999年の水準に回復し

た。しかし、2006年には42,000トンに大きく減少した。2007年は前年より大きく増加し、平年を上回る55,000トンとなった（図1）。

## 2. 漁況の経過

2007年4月～2008年3月における島根県～新潟県の主要港の水揚げ量は56,000トン（各府県の速報値等の集計による）であり、過去5か年（2002～2006）平均値（51,000トン）及び前年同期（42,000トン）を大きく上回った。日本海のマアジの漁獲量はまき網と定置網によるものがほとんどであり、平年では定置網の占める割合が4～7月の4か月以外には概ね20%以下でまき網の全漁獲量への寄与が大きい。まき網の漁獲量は春～夏にかけて平年を大きく上回ったが、10月以降は平年を下回る月も見られた。このようにまき網の漁況は全般的に前半が好調で、後半がやや低調であった。一方、定置網の漁況はまき網とほぼ同様な傾向を示し、4～7月の漁獲量は平年を大きく上回ったが、8月以降平年をやや下回る傾向にあった（図2）。地域別では、定置網が中心の中北部の漁況は前年及び平年を上回り、まき網が中心の西部の漁況が後半やや低調だったが、総漁獲量は10月と12～1月以外は前年を大きく上回り全般的に好調に推移した（図3）。

日本海西部では、春から夏にかけて体長10cm台後半の1歳魚（2006年級）の占める割合が大きく、初夏以降0歳魚（2007年級）の加入が見られ、11月以降の0歳魚の漁獲は堅調であった。中北部の定置網では、夏から体長10cm以下の0歳魚の加入が見られた。また、体長20cmを超える2歳以上の漁獲も見られたが、漁獲の主体は15cm以下の0歳魚と15～20cmの1歳魚であった（図4）。

## 3. 今後の見通しの説明

今後の日本海西部における漁獲の主体は1歳魚（2007年級）で、初夏以降0歳魚（2008年級）の割合が高くなると思われる。昨年（2006年）の資源評価の結果及び漁況の推移から2005年級と2006年級の加入水準が低かったと見られている。5～6月に日本海西部海域で行ったマアジ稚魚の加入量調査結果から、2007年級の加入量指数は前年より大きく増加したが、秋における0歳魚の漁況は低調であったため、1歳魚は前年と同程度と見積もられる。また2008年級（0歳魚）については予測が難しく今後の海況によって加入量が大きく変動する可能性もあるが、2007年級と同程度と見積もられる（平成19年度第2回対馬暖流

系アジ・サバ・イワシ長期漁海況予報、西海区水産研究所)。これらのことから、日本海西部海域から夏以降の中北部海域では、0歳魚、1歳魚及び2歳魚がともに前年並み、全体の来遊量は好調の前年と同程度と考えられる。

日本海中北部については、石川県による体長測定の結果では、定置網中心に2007年初夏以降0歳魚(2007年級)の漁獲に占める割合が高く、2007年級群の加入が順調であった。定置網の漁況は比較的堅調に推移したことから、1歳魚を中心にした相応の来遊が予想され、今後の漁況は好調の前年並みと思われる。

日本海に来遊するマアジは、中長期的に対馬暖流域の水温変動と正の対応関係が見られる。期間中6月までの対馬暖流域の50m深水温はやや高めで経過するとされ(平成20年度第1回日本海海況予報、日本海区水産研究所)、マアジ漁況への環境面からの影響は小さいと考えられる。

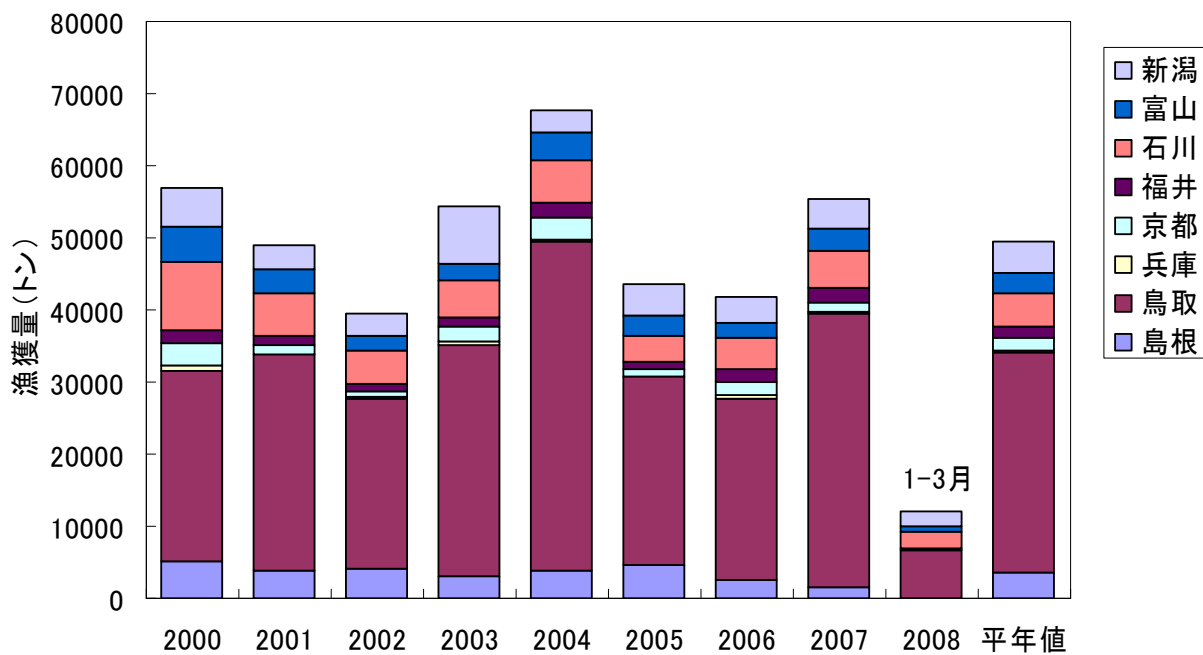


図1 日本海主要港（島根県～新潟県）の漁獲量の推移（2008年は1月～3月）。  
平年値は過去5か年（2002年～2006年）の平均値を示す。

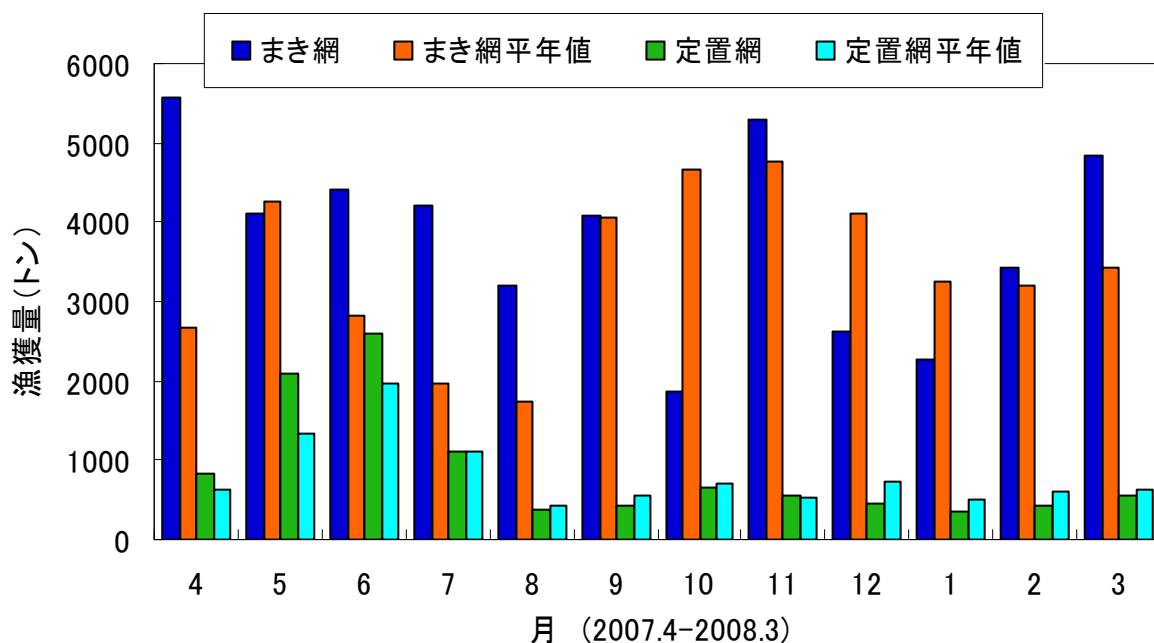


図2 漁業種類別漁獲量の経月変化（2007年4月～2008年3月）。  
平年値は過去5か年（2002年～2006年）の平均値を示す。

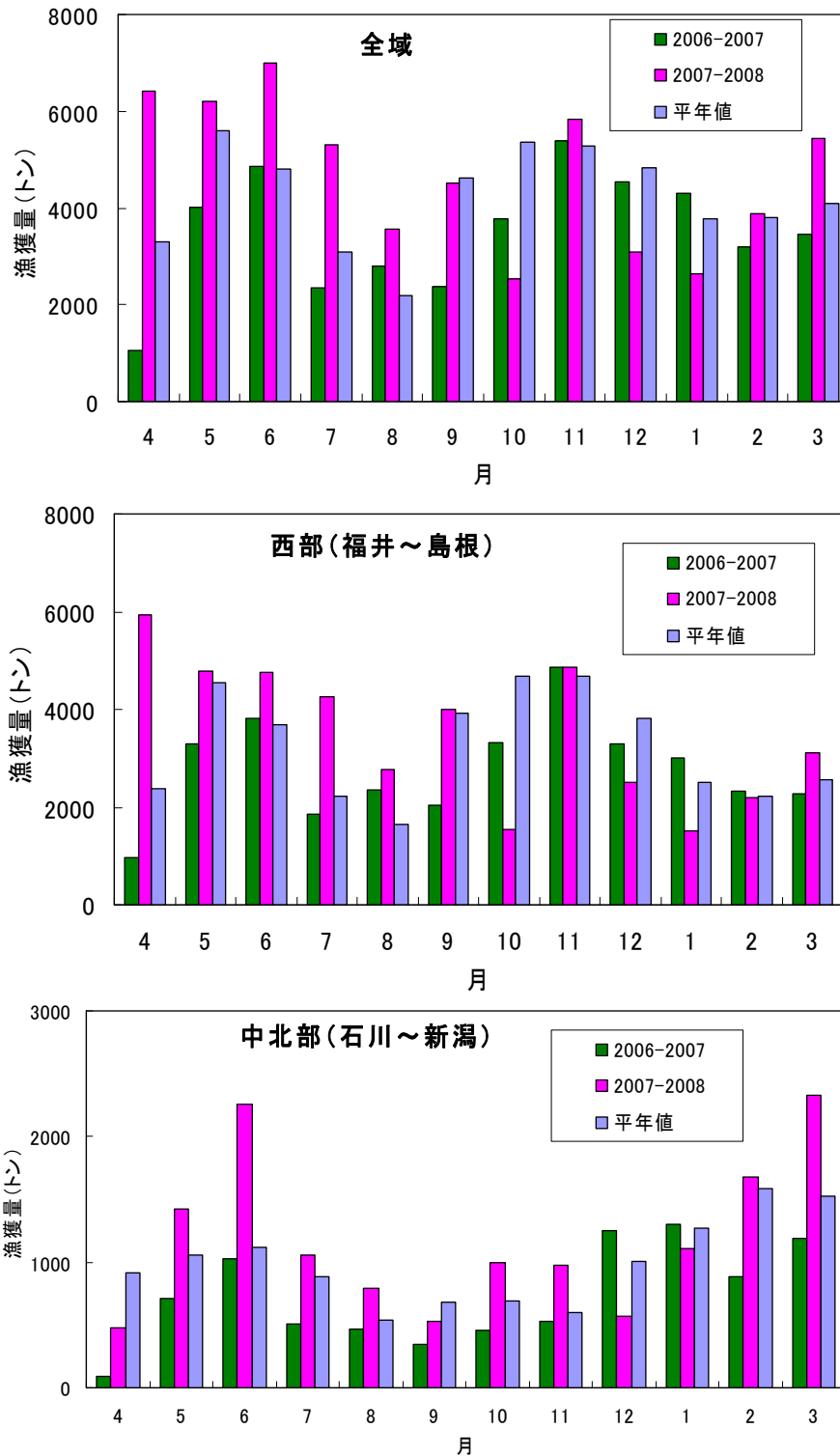


図3 日本海主要港への水揚げの経月変化

平年値は過去5か年（2002年～2006年）の平均値を示す。

島根県（まき網）

石川県（定置網）

新潟県（定置・底曳）

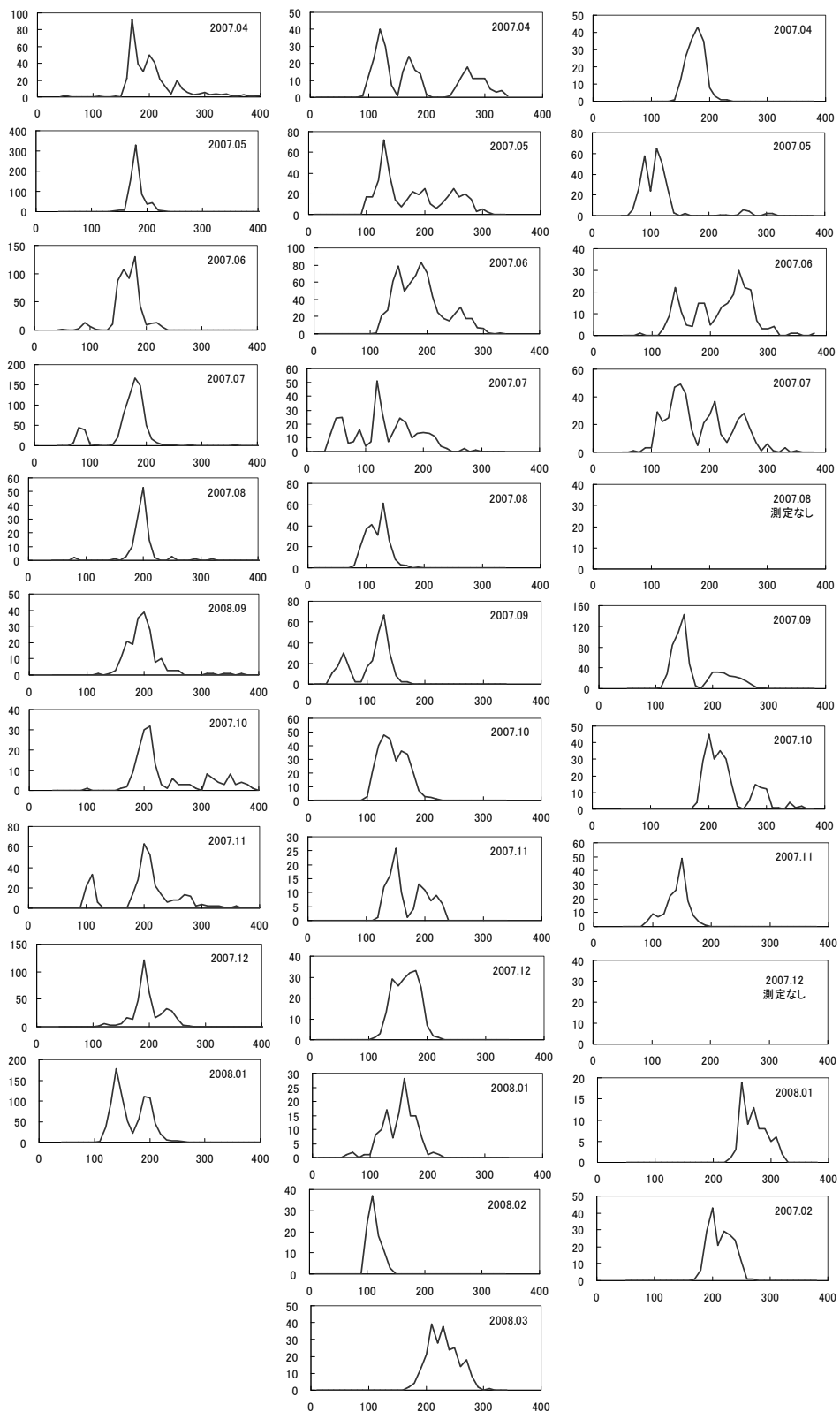


図4 体長組成の経月変化（2007年4月～2008年3月、各県調べ）

（横軸体長 mm、縦軸個体数）。



## 参 画 機 関

島根県水産技術センター

鳥取県水産試験場

兵庫県立農林水産技術総合センター  
但馬水産技術センター

京都府立海洋センター

福井県水産試験場

石川県水産総合センター

富山県農林水産総合技術センター  
水産研究所

新潟県水産海洋研究所

山形県水産試験場

秋田県水産振興センター

青森県水産総合研究センター

社団法人 漁業情報サービスセンター

水産庁 増殖推進部 漁場資源課

独立行政法人 水産総合研究センター  
西海区水産研究所  
日本海区水産研究所